慶應義塾大学学術情報リポジトリ
Keio Associated Repository of Academic resouces

Title	クロス・オーラル・ヒストリーズ : 四国遍路の歴史共同体をとらえるために
Sub Title	
Author	後藤, 一樹(Goto, Kazuki)
Publisher	三田社会学会
Publication year	2016
Jtitle	三田社会学 (Mita journal of sociology). No.21 (2016. 7) ,p.144- 147
JaLC DOI	
Abstract	
Notes	大会報告要旨
Genre	Journal Article
URL	https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AA11358103-20160702-0144

慶應義塾大学学術情報リポジトリ(KOARA)に掲載されているコンテンツの著作権は、それぞれの著作者、学会または出版社/発行者に帰属し、その権利は著作権法によって保護されています。引用にあたっては、著作権法を遵守してご利用ください。

The copyrights of content available on the KeiO Associated Repository of Academic resources (KOARA) belong to the respective authors, academic societies, or publishers/issuers, and these rights are protected by the Japanese Copyright Act. When quoting the content, please follow the Japanese copyright act.

三田社会学第 21 号（2016）

クロス・オーラル・ヒストリーズ

ー四国遍路の歴史共同体をとらえるためにー

後藤　一樹

四国遍路は、「歴史する doing history」（保苅 2004: 6）ことである。

保苅実は、オーストラリア先住民アボリジニの長老たちを「歴史実践」すなわち「歴史のメンテナンス」をする「歴史家」であると考えていた（保苅 2004）。

私の研究対象である「遍路（巡礼者）」や「お接待者（四国の地域住民）」ひとりひとりも、四国遍路の歴史共同体の「構造 structure」を用いながら「実践 praxis」をする「歴史家」である。彼・彼女らの個々の「実践」がまた、四国遍路の「構造」を再生産しているのである（Giddens 1993=2000）。

本報告で私は、保苅の問題意識や方法論を参照しながら、四国遍路の歴史共同体を論じた。これまでに私が調査してきた、四国遍路における「語り／物語の交差 cross narratives」（後藤 2015）や、そうした「社会的交通」（Bakhtin 1930=1989: 35）が生産する語りの「ポリフォニー polyphony」（Bakhtin 1963=1995）に関して、調査で得られたナラティヴや映像を用いて検証し、四国遍路の歴史共同体をとらえるためのオーラル・ヒストリーの方法を考えることが本報告の趣旨である。

特に本報告では、四国遍路に関する「超自然的な語り」をどうとらえ、どう表象したらよいかを考察した。保苅は、「超自然的な語り」あるいは「超自然的存在」について、「人間以外の存在者たちは、歴史のエージェントになれるのでしょうか？」（保苅 2004: 14）と問うている。この問いに、四国遍路の実践はどのように答えうるのか。

私が聞き取りを行った遍路・お接待者の語りは、彼・彼女らが四国遍路で出会った他者の言葉のイントネーションやアクセントをそのまま生かす「直接話法」を多く用いていた。すなわち、それらは、「他者のことばの伝達の＜絵画的＞スタイル」（Bakhtin 1930=1989: 184）をとっていたと言える。そこで、それらの語りを「線的な文字列」ではなく「絵画的な表」にして示しながら、以下 4 名のナラティヴを分析した。

１）「般若心経の写経を携えて遍路道を歩いていた遍路 A さんと地元のお接待者が、お接待者の息子の命日に偶然出会い、A さんが般若心経を彼女に手渡すと、彼女が涙した」という遍路 A さん（八十代男性）の語り（2014 年 9 月 14 日インタビュー）。A さんの語る出来事においては、科学的な因果関係では説明できない「シンクロニシティ（共時性）」（Jung and Pauli 1955=1976; 後藤 2015: 147-8）が発生している。また、お接待者が涙したのは、彼女が A さんを「お大師さん（空海）」であると感じたからではないかと A さんが語るように、「お大師さん」が今も四国を歩いているというリアリティが、この物語を生み出す要因となっている。

２）「12 番焼山寺に向かう険しい山道で足の動かなくなった遍路 K さんが、『橋の上で杖をついてごめんなさい』とお大師さんに謝ると、再び歩けるようになった」という遍路 K さん（六十代男性）の語り（2014 年 7 月 5 日インタビュー）。K さんは「お大師さん」に謝ることで、「正しい道」を再び歩けるようになったという。保苅によれば、「『正しい道』とは、地形としてのドリーミングの道跡（トラック）であると同時に倫理的行動規範でもある」（保苅 2004: 64）。四国遍路の倫理的行動規範の一つに、「橋の上を歩くときは、杖をついてはいけない」というものがあり、K さんの経験した出来事はこの規範を彼が内面化する物語であった。当規範は、今も遍路をしていると信じられている「お大師さん」が橋の下で眠るのを妨げないようにとの配慮からなされるものであるが、そうした配慮を通じて、「宿のない旅人には優しくするように」といった他者への気遣いを遍路に構造化するものである。すでに明らかになってきたように、四国遍路の世界において重要な「超自然的存在」とは、「お大師さん」に他ならない。

３）「私の前をお大師さんが歩き、私を導いているのが見えた」という五十代女性遍路 B さんの語り（2014 年 7 月 25 日・27 日インタビュー）。また、三十代男性遍路は、「弘法大師のイメージは、歴史上のあの絵のイメージが消えてって、自分のものになるというか。『同行二人』って言葉知ってると思うけど、歴史上の空海ではなく、自分にとっての空海」と語る（2013 年 12 月 14 日付フィールド・ノート）。「お大師さん」は「媒体 medium」である。四国遍路の世界で、人と人との関係は「お大師さん」に凝結し、「お大師さん」が人と人との媒体となっている（後藤 2015: 160）。それは、資本主義社会における「貨幣」のようである（Marx-Engels 1962=2005）。

４）「東日本大震災で親族を失った若者遍路が自分の店にやってきて、その話を聞くうちに言葉を失った」というお接待者 M さん（六十代男性）の語り（2014 年 6 月 23 日インタビュー）。「お大師さん」は、「すでに過ぎ去ったもの」換言すれば「目に見えないもの」の「霊媒 medium」でもある。四国遍路は、「聖なる時空」としての「過去」、その過去に住まう「死者」との対話がなされるフィールドなのである。目に見えない過ぎ去ったものを、現在の時空間において語り合う行為が、人々をして「過去（死者）」と対話せしめる。

本報告の後半では、保苅の感じていた限界を指摘し、その限界を解決するための代替案を提起した。

保苅の直面した限界とは、以下のようなものである。「私は、グリンジの長老たちが私に教えてくれた歴史実践のありようを、かれらが私に示してくれたように、そのままここに再現することはできない。本書の読者であるあなたは、残念ながらグリンジの長老たちと一緒にグリンジ・カントリーにいるわけではない」（保苅 2004: 51）。

保苅は、長老たちとの経験を文字に著すことによって、「フィールドの時間」と「ホームの時間」を分断するほかなかった。「フィールドの時間」と「ホームの時間」は、人類学者・田中雅一がハンネス・ファビアンの『時間と他者』（1983 年）を援用しながら作った概念である（田中 2011）。

「フィールドの時間」と「ホームの時間」を分断せずして、調査フィールドにおける「歴史実践のありよう」（保苅）をホーム社会のオーディエンスと共有する方法がある。それは、録音された音声や撮影された映像によって「フィールドの時間」をホームで再現前させる方法である。フィールドにおける「いま・ここ」は、とりわけ「Audio-Visual」メディアである映像によって、ホームで生きるオーディエンスの「いま・ここ」に接続され、詳らかに再現される。すなわち、そうした方法によって、調査者－被調査者の相互行為を成り立たせているフィールドの「共時間性」（田中 2011: 116）は、メディアを媒介にホームでもオーディエンスに共有されるのである。

文字化による「フィールドの時間」と「ホームの時間」の「差延」（Derrida 1998=2005: 182）に逆らい、フィールドの時間の「いま・ここ」すなわち「現象学的な声」（Derrida 1998=2005: 167）の発生するトポスに限りなく近づこうとする反デリダ的手法が映像表現なのであり、それこそが、保苅の目指した「経験的な歴史への真摯さ（experiential historical truthfulness）」（保苅 2004: 230）を豊かにしえるだろう。

デリダの「主体の脱構築」に反して、映像の時空間の中心に常に位置するのはカメラマンの「主体性／身体性」である。本報告での最後に私は、遍路道を歩きながら撮影し、そこで出会う人々との共時間性を映像に記録する私の「歴史する身体」（保苅 2004: 56）を、「84 番屋島寺への参拝」（2015 年 6 月 19 日）の映像を通してオーディエンスと共有した。

私は今後、発話者たちの語りが交差することで「聖なる時空」＝「過ぎ去った死者の時空」が出現するような「クロス・オーラル・ヒストリーズ」を追究し、そうした物語を生み出す「歴史実践のありよう」に関しては映像を用いてそれを再現前することで、保苅の果しえなかった課題の解決に迫っていきたい。

【文献】

Bakhtin, Mikhail Mikhailovich, 1930, *Марксизм и философия языка*, 2.изд. （=1989, 桑野隆訳『マルクス主義と言語哲学――言語学における社会学的方法の基本問題』未来社.）

————, 1963, *Проблемы поэтики Достоевского*, Иэд, 2е. Москва. （=1995, 望月哲男・鈴木淳一訳『ドストエフスキーの詩学』筑摩書房.）

Derrida, Jacques, 1998, *La Voix et le phenomene: Introduction au problème du signe dans la phénoménologie de Husserl*, Presses Universitaires de France, 2e edition corrigee. （=2005, 林好雄訳『声と現象』筑摩書房.）

Giddens, Anthony, 1993, *New Rules of Sociological Method: A Positive Critique of Interpretative Sociologies*, Second Edition, Polity Press. （=2000, 松尾精文ほか訳『社会学の新しい方法基準――理解社会学の共感的批判』而立書房.）

後藤一樹, 2015, 「漂泊のライフストーリー――ある歩き遍路の戦後史と私」『日本オーラル・ヒストリー研究』11: 147-71.

保苅実, 2004, 『ラディカル・オーラル・ヒストリー――オーストラリア先住民アボリジニの歴史実践』

御茶の水書房.

Jung, C.G. and W. Pauli, 1955, *The Interpretation of Nature and the Psyche*, Bollingen Foundation Inc.（=1976, 河合隼雄・村上陽一郎訳『自然現象と心の構造――非因果的連関の原理』海鳴社. ）

Marx, Karl-Friedrich Engels, 1962, *WERKE*, Band 23, Dietz Verlag. （=2005, 今村仁司・三島憲一・鈴木直訳『資本論　第一巻』上, 筑摩書房.）

田中雅一, 2011, 「運命的瞬間を求めて――フィールドワークと民族誌記述の時間」西井凉子編『時間の人類学――情動・自然・社会空間』世界思想社.

（ごとう　かずき　慶應義塾大学大学院社会学研究科／日本学術振興会特別研究員DC2）